

「キリストのゆえに」(フィリピ 3:5~11、17~4:1)

2019. 6. 23 川越キリスト教会・丸山 勉

【聖書】 フィリピの信徒への手紙 3:5~11

わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみえています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。

3:17~4:1

兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいく人々に目を向けなさい。何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。

だから、わたしが愛し、慕っている兄弟たち、わたしの喜びであり、冠である愛する人たち、このように主によってしっかりと立ちなさい。

序. 「わたしに倣う者となりなさい」とは

先週は川越教会の礼拝は所沢教会の坂本先生が宣教をして下さり、また、お昼も良きお交わりが出来たことをお聞きしています。また、私も無事に赤塚教会で奉仕をすることが出来ました。皆様のお祈りを心より感謝致します。

今日は再び「聖書教育」誌に準じて、使徒パウロの「フィリピの信徒への手紙」から聴いてゆきたいと思います。特に今日の箇所は、パウロの様々な手紙の中でも突出して彼の熱い思いが伝わってくる箇所だと思います。

3:17でパウロは、「わたしに倣う者となりなさい」と、フィリピの教会の人々に言いました。「私のようになれ」と。こういう言葉は、少々偉そうに聞こえないでしょうか？ 傲慢ではないかと。けれども、改めて読んでそうではないと思いました。この手紙は、彼が今獄中であって、もしかしたらもう会えないかも知れない、そういう緊張感の中で書かれた手紙です。「このことだけは言い残したい」という遺言のような手紙と言って過言ではないと思います。—「死」をも覚悟している捕らわれの身だからこそ、信仰の仲間に対して、彼は余計なことは全く言わず、信仰というものがどれほど大きな生きる希望であるのか、そのことを知ってほしい、私パウロはただ信仰にだけ生かされている者なのだから、言って

みれば「信仰の師匠」として私に倣ってほしい、と言っているのだと思います。

1. 「わたしにとって」と「キリストのゆえに」

3:5 以下で、彼はキリストに出会って自分がどう変えられたのか、その「証し」を書いています。彼はまず、かつての自分が「誇り」にしていたものを列挙します。5、6 節です。

「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。」

けれどもそのパウロは、続けてこう告白します。7 節以下です。

「しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。」

彼は今や、自分の生い立ちや、社会的な評価・評判を誇ってはいません。それは人間的には誇っても誰も文句が付けようのないものだと言えるでしょう。しかし彼はそれを誇るどころか、逆に「損失」＝邪魔なもの、と捉えています。何故か。「主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさ」ゆえにです。ここでパウロの文章は、対になっていることに注目したいと思います。7 節ですが、「わたしにとって」と、「キリストのゆえに」という言葉です。英語で言ったら、どちらも「for」になるのだと思います。「for me」と「for Christ」です。パウロは、人間的な誇りなど、キリストに出会った今はそれが本当につまらないもの、「塵あくと」思えたのです。彼は、「わたしにとって」=for me の生き方を喜んで捨てたのです。「キリストのゆえに」=for Christ の生き方を得たからです。 8 節後半からの言葉、ここでも「キリストのゆえに」という表現が出てきています。「キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。」

2. 涙ながらに語るパウロ

このように書いているパウロは、以前は、キリストの十字架に敵対し、クリスチャンたちを迫害していた人物です。少し飛びますが、18 節以下の言葉は、パウロは客観的に語っているだけでなく、自らを振り返って語っている言葉ではないでしょうか。

「何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。」

—「涙ながらに言う」と言うのですね。彼は書きながら思いが溢れてしまったのだと思います。そう、十字架というのは、人間的に理解出来るものではない、自分も十字架を恥

すべきものと思っていたのだと。でも、これこそが神様が与えて下さる救いなのだ。「十字架の言葉は、滅んでいく者には（パウロはかつての自分自身を重ねている）愚かであるが、救いに与る者にとっては神の力である」とコリントの信徒への手紙一の1章18節で語ったように、生まれつきの人間は、実は、キリストが十字架を愚かしいもの、自分とは無縁なものとししか考えられない存在なのです。「十字架」と聞いても、「ああ、キリストという方は気の毒な生涯だったのだなあ」としか思えない者なのだと思います。神様を必要としないのです。自己中心の中に安住してしまい、「自分」を誇る。そしてキリストを殺すのです。ですからパウロは、かつての自分がそうでしたから、涙ながらに言うのですね。

「彼らの行き着くところは滅びです。彼らは(自らの)腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。」(3:19)。厳しい言葉ですが、パウロは、自分自身を神とするな、そこには救いはない、自分で自分を救おうとする「傲慢」を捨てよ！ キリストの十字架を無駄にすることこそ最大の罪なのだと、愛を持って言っているのではないのでしょうか。

そして、パウロは、その後で信仰者の輝かしい「終わりの日の希望」を語るのです。20～21節。—「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」

一見すると、何か唐突に「復活の命」のことが語られているような印象を受けますが、そうではなく、パウロはむしろ、現在を生きるということは、この「希望」に支えられ、またこの「希望」あってこそそのものなのだ、と語っているのだと思います。

3. この希望から逆算して生きる

「わたしたちの本国は天にあります。」この本国というのは、「国家」=nationではありません。私たちが市民権を持つ共同体、という意味です。権力機構ではなく、そこには真に平等な「交わり」があるのです。それが、この地上を超えた天にある。この地上は差別があります。数の論理がモノを言うまやかしの民主主義がまかり通っています。しかし、あなたの目を天に上げなさい！ ここには、全ての人が神の子として重んじられる共同体が用意されているのです。その中心におられる方が、十字架にかかり、復活されたキリストです。パウロは言います。「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」(3:21)—何と輝かしいお約束でしょうか！

先週の木曜日(20日)、この川越教会で小山禎兄弟の告別式を執り行いました。禎さんのお身内の方を中心にしてその営みを致しました。その告別式に当たって、私の心に響いてきたのは、やはりパウロが記した復活の確かな約束の御言葉でした。——「死者は復活して

朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。」(コリントー 15:53)

私はこの言葉が大好きなのです。「必ず（復活の体を）着ることになります」という言葉に、私は本当に希望を抱いています。このフィリピの信徒への手紙と同じですよ。—「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」と。

信仰とは、この「希望」から逆算して生きることではないでしょうか？ 終わりの日の約束から生きる。もちろん、この世の生活を軽んじなさいと言うことではありません。厭世的になることは、信仰的ではないと思います。むしろ逆でしょう。私たちの具体的な生活の場、環境や交わりを、神様が贈って下さった場、与えられた場として大切にすることが求められていると思います。何故なら、イエス様は、この地上に、敢えて“降りて来られた方”だからです。このフィリピの信徒への手紙全体の中で、特に宝石のように輝いている「キリスト賛歌」と言われている言葉に注目したいと思います。2章6節から11節です。

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。」(フィリピ 2:6~11)

私たちの救い主は、私たち人間のことを上から眺めて「ばかな人間たちよ」と腕を組んでいるお方ではないのです！ いても立ってもいられないで、神と等しい方でありながら、徹底的に低くなられたお方です！ 私たちの苦しみ、悲しみ、罪とさえ連帯するためにです。だから、恥をも厭わず、十字架に架かって下さいました。そして、神様は、そのイエス・キリストを捨て置かず、よみがえらせて下さいました。そのことによって、「すべての（者の）舌が「イエスは主なり」と公に告白し、神を讃えるのです」と語っています。すべての舌。例外がないのです！すべての人が、キリストを復活させた神様の全能の力に与り、私たちもまた、復活の命によみがえるよう、招かれているのです！

結. この恵みにしっかりと立って

この「終わりの日の望み」を信じる者は、打たれ強いのです。肉体を持つ生活は決して優しくはありません。厳しいものがあると思います。小山 禎兄弟も、お見舞いに伺った或る時に、ポロっと「時々もういいかと諦めそうになる気持ちになることがあるけれども、

負けないように頑張っています」と仰っていました。本当に頑張っておられました。教会の皆のお祈りを感謝していますといつも言っておられました。けれども、15日の未明に、（何と、お連れ合いの京子さんと全く同じ0時50分に！）この地上の旅を終えられました。禎さん、本当にお疲れさまでした、と言いたいですね。そして「ありがとうございます」と言いたいです。

小山兄弟は、「前のものに全身を向けつつ」「目標を目指して走り」抜かれたのです。（フィリピ 3:13、14）。3人のお子さんを自立するまで育てられ、信仰を得てからは献身の思いも与えられ、京子さんと共に川越教会で、また、諫早教会で仕えられました。禎さんも「forme」の人生から変えられたのです。正に「キリストのゆえ」に、生涯を賭けて惜しくない生き方を走り抜かれたのです。その生き方、また、最後のお姿は、私たちに語ってくれていると思うのです。

「わたしが愛し、慕っている兄弟たち、わたしの喜びであり、冠である愛する人たち、このように主によってしっかりと立ちなさい。」（フィリピ 4:1）

私たちも、計り知れない神様の恵み、キリストの愛、永遠の命の望みに、しっかりと立ち続けてまいりましょう！「**私たちの本国は天にある**」のです。

お祈り致します。